



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	H. G. ガダマー『真理と方法』における存在の遊び：芸術、伝承、言語の呈示的本性をめぐって〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	宮崎, 勝正
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16493号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94895
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Katsumasa_Miyazaki_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 宮崎 勝正

主査 教 授 田口 茂
審査委員 副査 教 授 藏田 伸雄
副査 准教授 今村 信隆

学位論文題名

H.G.ガダマー『真理と方法』における存在の遊び
——芸術、伝承、言語の呈示的本性をめぐって——

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は、H. G. ガダマーの『真理と方法』を主なテキストとし、そこに見られるガダマーの解釈学の諸相に対して一貫した理解をもたらしうる観点として、「遊び」（Spiel）という概念に着目したものである。本論文の学術的成果としては、主に以下の点が挙げられる。

第一に、ガダマーにおける「遊び」という、先行研究においてまだ一致した解釈の見られない概念を、ガダマー自身のテキストに即して綿密に検討し、その基本構造を説得力ある仕方で提示している点である。その基本構造は、遊びの運動それ自体が自らに特定の規則を与え、その規則に遊び手を従わせるということ、そのなかで遊び手の主体的な関与も、この出来事を一回的で個別的な完結性にもたらしという仕方で不可欠の役割を果たしているということ、によって示される。遊びを支配している主体は遊び自体であり、遊ぶ者はその運動に巻き込まれているのだが、同時に、その運動に具体的な形を与えるためには、遊ぶ者の参与が欠かせない。この特有の構造を、単にガダマーのテキストの整理としてのみならず、遊びという現象の具体的分析を通して事象的に示した点に本論文の第一の学術的意義がある。

第二に、このような人間の遊びに見られる固有の特徴が、芸術作品、理解、言語の解釈においても一貫して見られるということ、を、テキストと事柄に即して丁寧に論証している点である。「遊び」という概念はすでに先行研究でも重要概念として認知されているが、この概念をガダマーのテキストに即して忠実に解釈し、それをもとに彼の解釈学の一貫した体系的解釈を示した先行研究はまだ見られない。本論文は、人間の遊びの特徴を具体的に検討することによって、「遊び」概念によって表される出来事の重要な構造を際立たせ、それをもとに芸術作品の存在、人間の根本的な営みとしての「理解」の構造、ガダマーがとりわけ重視する「言語」のあり方のうちに、こうした「遊び」の特徴が一貫して見られることを、テキストと事柄の両面から丹念に論証している。

第三に、「遊び」概念を基盤としつつ、芸術作品の存在に見られる本質的な特徴について、一つの説得的な描像を与えることに成功している点である。本論文第二章では芸術作品の存在が分析されるが、そこではガダマーのテキストの丁寧な読解の成果が示されると同時に、絵画、音楽、建築などの具体的な芸術作品に即して、事柄の上で「遊び」の構造にもとづく解釈の有効性が示されている。一方で、芸術作品が存在しなければ、その上演も鑑賞もないのであるが、その上演や鑑賞などの「呈示」は、芸術作品そのものに新たな可能性や新しい視点をもたらすのである。

第四に、ガダマー解釈学において理解の難しいポイントである「伝統」と「言語」の問題について、一つのきわめて明晰な理解の見取り図を呈示している点である。理解する者（読者）は、単にテキストのなかに流れ込んでいる伝統（伝承）の言いなりになっているわけではない。テキストの内容は、読者の先入見、あるいは読者の立てた問いのもとでしか現われない。そこにおいてのみ、伝統は自らを規定する機会を得るのであり、伝統は現在と過去を媒介するなかで絶えず自己を更新していく。言葉にするとすることは、つねに誇張や省略を含むが、そこで立ち現われ

るものこそがテキストの意味そのものなのであり、テキスト理解とは「対話」にほかならないのである。以上のような明晰な観点が示されている点は、本論文の重要な学術的成果と見なすことができる。

・学位授与に関する委員会の所見

本論文の一部が下敷きとしている諸論考は、日本哲学会の若手研究者向け査読誌『哲学の門』や、ガダマー研究の査読付き専門誌である『ガダマー研究』といった全国学会誌に採択されている。このことは、申請者の研究水準の高さが学界においても十分に認められていることを示している。

審査委員会では、序論の叙述が十分に詳細でないため、論文全体の意図に関してわかりにくい部分があるという指摘や、先行研究のレビューが本文中の各所に分散して書かれているため、本論文の位置づけに関する概観が得られにくいという指摘があった。また、「理解」という人間の根本的な営みに対して、なぜ「遊び」概念をより根本に置くアプローチが正当化されるのか、という疑問も提起された。しかし、学位申請者は口頭試問において、いずれの点に関しても口頭で十分に説得的な説明を行い、博士論文の記述を補完することができたため、これらの問題点は本論文の学術的価値を損なうものではないと判断した。

以上の審査結果に基づき、本審査委員会は、全員一致して学位申請者に博士（文学）の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。